

杉本苑子
繪島疑獄

(下)



繪島疑獄 (下)



杉本苑子

毎日新聞社

絵島疑獄(下)

定価 一〇〇円

昭和五十八年五月五日 第二刷
昭和五十八年八月十五日 第三刷

著者 杉本苑子

編集人 川合多喜夫

発行人 関根望

発行所 毎日新聞社

〒一〇〇 東京都千代田区一ツ橋
〒五三〇 大阪市北区堂島
〒八三三 北九州市小倉北区紺屋町
〒四四〇 名古屋市中村区名駅

印刷 中央精版
製本 大口製本

絵島疑獄

(下)

目次

八	陷	藤	返
丈		枝	
つ		と	り
む		い	
ぎ	穿	う	
		女	花

150	99	47	7
-----	----	----	---

山	島	風
河	便	渡
寂		
光	り	る

266	231	190
-----	-----	-----

装

幀

川

田

幹

絵島疑獄

(下)

花 返

一

平田彦四郎との逢う瀬を氣ままに楽しむどころではない。来客や招待に追われて絵島は一人にすんなかなかななかつた。

兄の白井平右衛門とは逆に、しかしもともと賑やかなことの好きな、明るく、さっぱりした氣性だから、来る者を強いて拒むわけではなかつたし、

「たかが菓子折りぐらい、貰ったからってどうということはありませんよ嫁さま。人のうちを訪ねるのにだれだって当節、手ぶらというわけにはいかないでしょう。当り前な礼儀ですもの」

そう言つて、客の持参する手土産などにも、ことさら氣を兼ねる様子が無い。

物のあり余る大奥で、ご下賜の品々に埋もれてくらすうちに、知らず知らず物への有難みが稀薄になり、贈つたり受け取つたりする行為にきちつとけじめがつけられなくなつたとも言えるが、生まれつき絵島には、些事さじにかかわらない太っ腹なところがあつた。氣骨の折れる奥勤おくけんめを永年ながねんつづけてこら

れたのは、こまごました心くぼりの裏に男まさりな氣宇^{きう}をひそめていたからだし、水汲みの婢^{はした}までいれれば千人に近い女中たちの頂点に君臨しながら、ひどく人望が厚かったのも、江戸ッ子肌のこだわりのなさ、親分氣質の包容力によるのである。

落度^{おちど}は叱る。しくじりにもきびしい叱言^{ちご}が飛ぶが、うじうじ、いつまでも尾を曳かない。非をみとめて素直にあやまりさえすればたちまちもとの笑顔にもどるし、まして陰日向^{かげひなた}なく働く者には目をかけて、褒めたり引き立てたりしてやったから、

「話のわかるお局さま」

と慕われて、愚痴や悩みごとの相談まで絵島のところへ持ちこんでくる腰元たちが少くなかった。ほとんども仲間同士の感情のゆきちがい、上司の無理にたまりかねての訴えだが、中には裁き方一つで縄つきが出かねない面倒な悶着も起こる。

「大事にしていた櫛^{くし}がなくなったのであちこち搜したら、なんと、同じ部屋に寝起きしている朋輩^{ほうばい}の行李^{こうり}の底にあったんです。どうかご詮議の上、取り返してくださいまし」

こんなときのけりのつけかたも、いかにも絵島らしい淡泊なものだった。

「それはおっ母さまの形見とか叔母さまからの譲り物といった特別な品なの？」

「いいえ、この前の宿さがりのとき通り二丁目の三津輪で買った塗り櫛です。二分二朱もしたんです」

「それならまた買えるじゃないか。盗^とってまで欲しがる櫛など、いさぎよくその子にくれてやっておしまい。人の念のかかった物を惜しむより、新しい櫛で装ったほうが気持がよいよ」

そう言いながら懷紙に幾らか包んで渡す……。しかし、このような解決方法が妥当かどうかは論の分かれるところであろう。集団生活の中で、盗み癖のある者を放置しておいてよいのか、盗みそのも

のについても、はたして本当にあったことかどうか、もしかしたら朋輩を陥^{おとし}れ^{いれ}るための悪質な作意かもしれないではないか、そのへんの糺明をしつかりしてのけるのが監督官の立場にいる絵島たちの責務ではないか、とも批判はできよう。

だが、そこが江戸育ちに共通した大ざっぱさ、思考のきめの荒さであった。こまごまと真相をつづくり出して繩付きなど作るより、見て見ぬふり、知っていて知らぬ顔の裁きのほうがかえって当人たちを恥入らせ、反省させる効果がある、だいいちしち面倒な詮議などお齒に合わない、べとつきがちな女ばかりの集まりだからこそ、粹^{いき}な、さらりとした裁きのつけ方が必要なのだとは、月光院からしてその気性の中に持っていた好みの傾向なのだ。

ほとんど京女ばかりで構成されている天英院^{ひろこ}熙子の奥向きとは大きく相違するのびのび活き活きとした雰囲気^{きふき}のなかで、現將軍家を手の内に擁している安心感から、いささか思いあがり、氣を緩めもしつつ、さざめき合つて過ごしていたのが絵島をはじめとする月光院派の女中たちの、正徳二年から三年にかけての明け暮れだったといえよう。

「おっしゃる通りですわ美喜さん、あなたと少しでも近づきになりたくて、勝手に押しかけてくる客たちですよ。当方が頼んでお越しねがったわけではなし、応対の手間ひまを済まながって持つてくる手土産ぐらい、お辞儀なしで頂いてしまったってちっともかまわないのに、うちの殿さまときたひにはご存知の堅物^{かたぶつ}でしょ？ やれ、うるさいの、物など受け取ることまかりならんのとガミガミ言いつづけですの」

我が意を得た顔で絵島に同調する佳寿^{かず}は、これも義妹の権勢に酔つて浮き浮きしすぎている一人であつた。

「なにも文句など言つたらん。ただ美喜にもお前にも、ちやはやされるのを当り前に思つていい氣に

なるな、とだけ申しておるのだ」

白井平右衛門の諫めこそが、あるいは当を得たものだったかもしれないのだが、

「すぐカッとのぼせて、相手かまわず喧嘩沙汰を引き起こすくせに、あなたってかたは見かけによらず小心なんだから……」

佳寿は齒がゆげに一蹴したし、

「別にわたくし、いい氣になんていませんけれど……」

と兄の言い方に、絵島も不快げな顔をした。

「そうですよ失礼な。美喜さんにあなた、意見がましいお口などきけた義理ですか？ 大坂での不始末が『遠慮』ぐらいですんだのも、このほどその『遠慮』を解かれたのだってみな、美喜さんの取りなしのおかげではありませんか」

「そんなことを恩に着せるつもりもわたくしにはございません」

「わかってますとも。美喜さんの男まさりな、竹を割ったようなご気性はだれよりもわたしが存じあげてますし、こんどのお骨折りに感謝しているんです。だからせっかく宿さがりなさって、のんびりくつろいで頂こうというやさき、なるべく嫌なことなどお耳に入れたくはないんですけどね、ほら、例の豊島の平八郎さん」

「弟が何か……」

「先妻のお艶さんが亡くなったあと、お雪って側女そばめを後添えに直しましたでしょう。子までありながら、どうもだいぶ前から夫婦仲がまずくなっているようなのですよ」

「どうりで春の舟あそびのとき、二人とも何となく素振りがぎくしゃくしていましたわね」

「美喜さんもお氣づきになつて？」

「わたしどもには尋常に挨拶などしてたようですが、あの雪って人、平八郎とはろくに口もきいていませんでしたよ」

「そうなんです。なんですか出るの別れるのという騒ぎだそうなので、わたし、手紙で言っただけです。昔ならともかく、美喜さんが出世なさった今、身内のごたごたはあのかたの名折れになる、お氣をつけなさらないければいけませんって、ね」

何を言っても佳寿の言葉は義妹への追従に結びつく。あべこべに白井平右衛門はいよいよ苦り切った表情で、

「町人に訴えられたこのおれだって、妹にすれば恥さらしな兄だ。兄弟で、血のつながりもない美喜に迷惑をかけているのだから世話はないな」

自嘲した。

「まあまあ兄さま、そんな僻^{ひが}んだような言い方をなさるものではありませんわ。それよりいかがでしょう、雪さんとやらをしばらくのあいだ、わたくしがお城に預かるという手は……」

佳寿に、絵島は提案した。

「しばらく別れ別れにさせておくと、おたがいへのほせが引きさがって、自分の非を反省するようになるものです。そのあいだ、子供らの世話を召使まかせにしておくのが不安心だったら、ご面倒でも当家に寄宿させるなり何なりして……」

「それはかまいませんけど、できますの？ 雪さんをお手許に預かっていたくなんてことが……」
「できますよ。私用の部屋子という名目でわたくしの手許に置いてあげればいいのです。もっとも雪さんが承知すればの話ですけれどね」

「渡りに舟のお申し出ですね。どうしても仕方がないとなったらぜひ、お願いしとうございますけ

ど、その前に美喜さんから意見してやってほしいんですよ。わたくしどもが何を申したところで効き目はありませんが、美喜さんのおっしゃることなら恐れ入って傾聴するはずですから……」

じつはこの春の舟遊山を、美喜さんがとても気に入ってくれた様子なので、

「こんどは大川筋の秋の風情を楽しんでいただくうじゃありませんか」

と平八郎どのが言い出し、また親戚知友が集まって内々にその用意をととのえている、言い出しつぱだし、豊島夫婦もむろん参加するはずだから、船中で不仲の仲裁をしてやってはくれまいか——そう佳寿は言うのであった。

二

「舟あそび？ それほまあ、ありがとうぞんじます。ぜひつれて行ってくださいましな嬢さま。さくらの時はまだ、遠慮差し控え中で兄さまがお見えになれませんでした。こんどはご一緒できますね」
絵島の誘いに、しかしやはり白井平右衛門は重くるしい顔で、

「うん。まあな、行けたら行くよ」

生返事をしたにすぎない。前回の費用はどこか知らないが、

「借りるあてがある」

とかで弟の豊島平八郎がいっさい賄い、後日それに対する礼が、実費を差し引いて釣りがくるぐらい絵島から届けられたと聞いている。味をしめたのだろう、したがって今回も平八郎が、

「兄貴にはこんなことは無理だ。おれがやるから委せておいてくれ」

と買って出て、どうやら百合の父親の奥山喜内を相手に、船宿や仕出し屋の手配など小まめに駆け

廻っているらしい。

それはいいとしても、前回同様こんどだって、いずれたつぷり絵島から金が行くにきまっている。礼を言いながらつまり絵島は、自分の支出で遊ばせてもらっているのだし、親類どもはそれにおぶさって一日の歡を尽すのだ。

(たかりじゃないか)

と思うから平右衛門は気がすまないのである。佳寿など、陰では、

「いいんですよあなた、何から何までご主家持ちの結構なご身分じゃありませんか。ご扶持の使い道に困っていらっしゃるんですからね。わたしらにおくるのは美喜さんにとってもいい気分にかがいございませんよ」

身勝手な理屈をつけているが、名だけでも兄だけに、平右衛門の心情の底にはもっと親身しんみなあたたかみがあった。

なるほど女にしては高給取りだ。でも一生奉公を誓って諸侯將軍家などの奥向きに仕える上女かみたちは、結婚を犠牲にしている。働けるあいだに貯めた金で、老後の一人ぐらしを支えなければならないのである。

(大事なその金を、寄ってたかって食い散らそうとするなど、さかしい)

美喜が可哀そうだと思いがち、口下手なため佳寿の舌に言い負かされて、平右衛門は結句けつぐ、不機嫌いらいそうな、煮え切らぬ態度のまま黙りこんでしまう。そんな夫に気を揉んで、佳寿は佳寿でしきりに苛いらら立った。

「なんですなえあなた、その顔は……。美喜さんの、たまの骨休めが台なしになります。はつきり行くとおっしゃいまし。せつかく誘ってくださっているのに……」

「舟あそびか？」

「そうですよ」

「行くさ。行きやあいんだろう」

と、果ては喧嘩腰の気まずさにも陥るのである。

しかも当日、集合場所に決められた江戸橋ぎわまで出て来てみると、遊山の規模は前回の比ではなかった。川一丸、若松丸と船腹に船名を記した主船が二艘——。それに五艘もの茶舟、供舟が附いて掘割りづたいに大川へ出、ゆっくり流れをさかのぼって言問、三囲への秋色を満喫しようというもくろみらしい。

江戸橋は房州の木更津はじめ下総、上総、相模の諸港と往来する舟着き場なので、西側の岸は木更津河岸とも呼ばれ、問屋々々の商標や家紋を打ち抜いた白壁の土蔵が、まぶしく日ざしを反射している。

北岸は朝夕、魚市の立つ魚河岸……。

南の橋詰めには船宿が並んで、中でも大構えな巽屋という店の軒先に豊島平八郎がたたずんでいた。

「やあ美喜さん、お待ちしてました。兄貴もお出ましとは珍しいな。佳寿さんに曳きずられて来たんでしょ」

と、日ごろ仲のよくない平右衛門にまで平八郎は愛想がいい。

それはいいが、二、三步さがって小腰をかかめている町人態の二人に絵島は見おぼえがあった。大奥入りのご用達商人、呉服所の筆頭に任ぜられている後藤家の奉公人どもではないか。

「はい、手代の清助、同じく次郎兵衛と申します。主人縫殿助がご接待にまかり出るところでござい